

現代言語学（翻訳） 第1章

日 野 資 成

はじめに

今回からは、O'Grady その他 (2005) による Contemporary Linguistic (5th Edition) を翻訳する。この本の主著者 O'Grady はハワイ大学で言語学（統語論、形態論）のご教授をいただいた教授である。原著は言語学の入門書として全米で使われている。今回、この日本語訳を通じて、日本の学生にも言語学に興味を持っていただきたいと思い、翻訳することとした。その第1回目は第1章を翻訳する。

第1章 ことば：はじめに

William O'Grady

Michael Dobrovolsky

ことばは、他の生き物と区別する唯一の遺伝子学的特性として、人間に与えられた贈り物である（Lewis Thomas, 『細胞の生命』より）。

ことばとは、コミュニケーションの体系であり、考えを伝えるものであり、文学的表現の手段であり、社会習慣であり、政治的議論の手段であり、国家建設の触媒となるものである。どんな人でも、少なくとも一つのことばを話し、ことばなしに社会的、知性的、芸術的な活動が起こることは考えられない。人間は皆、ことばの性質や使用について考えられるような能力を兼ね備えている。この本は、このようなことを研究する学問である言語学への入門書である。

1. 創造的体系

人間のことばとは何だろう。ことばを知るとはどういうことだろう。こんな問いに答えるためには、原語話者 (native speakers) が生まれてからことばを自然に習得できるようになるのはどうしてだろうか、ということを考えてみる必要がある。

人間の考えや経験は複雑多岐で、それを表現することばも複雑にならざるをえない。コミュニケーションは固定した話題に限られるものではないので、ことばもお仕着せのメッセージ以上の役割を果たすはずである。必要が出てくれば、新しい語や句、文が作られなければならない。つまり、人間のことばは、新しい考え、経験、状況に応じて新しい表現を生むように創造的 (creative) でなければならない。

複雑な心的システムは、新たなことばを生み出すが、新たなことばが生まれる場合と生まれない場合との境界線もはっきり示す。このシステムによってことばが作られる例を英語で考えてみよう。英語では名詞から動詞が作られる。

表 1.1 動詞として使われる名詞

名詞の用法	動詞の用法
pull the boat onto the beach	beach the boat
keep the airplane on the ground	ground the airplane
tie a knot in the string	knot the string
put the wine in bottles	bottle the wine
catch the fish with a spear	spear the fish
clean the floor with a mop	mop the floor

次の例のように、名詞から動詞を作る方法もさまざまである。

1)

- a. I wristed the ball over the net. (ネットを越えて手先でボールを投げた)
- b. He would try to stiff-upper-lip it through. (彼はずっとがまんしようとした。keep a stiff upper lip「がまんする」より)
- c. She Houdini'd her way out of the locked closet. (彼女は鍵をかけたタンスから出てきた。Houdini (魔術師の名) より)

しかし、一方で動詞にできない名詞もある。たとえば、ある特定の意味で作ろうとした動詞がすでにある場合である。jail the robber（盗人を刑務所に入れる）とは言えるが、prison the robberとは言えない。これは、imprison（刑務所に入れる）という語がすでにあるからである。

ほかにも動詞にできる名詞には制約がある。時間を表す名詞がそうである。

2)

- a. Julia summered in Paris.
- b. Harry wintered in Mexico.
- c. Bob vacationed in France.
- d. Harry and Julia honeymooned in Hawaii.

3)の文は自然であるが、3)の文は文法的でない（*はその文が非文法的であることを表す）。

3)

- a. *Jerome midnighted in the street.
- b. *Andrea nooned at the restaurant.
- c. *Phillip one o'clocked at the airport.

これらの例から、一定の時間を表す名詞は、「一定の時間 X にどこかにいる」という特定の文脈でしか動詞にならないということがわかる。(2a) の to summer in Paris は「夏にパリにいる」、(2c) の to vacation in France は「休暇中にパリにいる」という意味である。noon や midnight は一定の継続した時間でなくある時点を表すので、動詞にすることができないのである。

創造の過程において欠くことができないのは、このように体系的な説明ができるということである。もしもすでに定着している語が人間の創造力によって絶えず変えられていくとしたら、語彙は不安定になり、コミュニケーションが成り立たなくなってしまうにちがいない。同様に、名詞から派生した動詞の意味に制約がなかったらどうだろう。もし They winter in Hawaii が「ハワイで雪を降らせる」とか「ハワイは冬がいい」その他好き勝手な意味だとしたら、新しくことばを作り出す過程の体系的性が失われ、コミュニケーションにおけることばの役割が薄れてしまうだろう。

その他の例

人間の創造力は、ことばのさまざまな面に現れる。語を作るときに組み合わせられる音の順序もそうである。たとえば4)に挙げた語は、新しい製品とか過程を表す名前として可能である。

4)

a. prasp

b. flib

c. traf

一方で5)に挙げた語は英語には現れない。

5)

a. *psapr

b. *bfi

c. *ftra

4)と5)に挙げられた語を比べると、音の新しい組み合わせにも何らかの制約があることがわかる。

既に英語にある形式の語尾を変えて、新しい語を作ることもできる。たとえば、soleme（新しく発見された原子の粒子としよう）という単語が英語にできたとする。原子の粒子の性格を持っているという形容詞は solemic である。また、あるものを原子の粒子にするという動詞は solemicize であり、その過程は solemicization である。このように soleme から一定の制約を持って派生語を作ることができるし、また、solemicize の c は s で発音されるのに対して、solemic の c は k で発音されることも知っている。さらに、solemicize のアクセントは第2音節にあり、soLEmicize と発音し、SOlemicize でも solemiCIZE でもないことも知っている。これはアクセントの制約である。

文を作ったり理解したりするときほど、新しい発話を扱う人間の能力ははっきり現れるときはない。慣用句やあいさつを除くと、一日に言ったり聞いたり読んだりするもののほとんどは、はじめてのものである。会話や講義、ニュース、教科書などで、人間はいつも語の新しい組み合わせやなじみのない表現、新しい情報に接している。たとえば、今読んでいる段落を考えてみ

よう。それぞれの文は完全に理解できるが、これとまったく同じ文を今までに見たことがあるということはまずありえない。

しかし、なじみのない発話を作ったり理解したりする能力にも制約がないわけではない。たとえば、6)にあるような発話は（全く不可能ではないにしても）、理解するのは非常にむずかしい。それぞれの語はみな知っていても、その語の配列が、英語の文の配列方法とはちがっているのである。

6)

Frightened dog this the cat that chased mouse a.

（正式の配列は This dog frightened the cat that chased a mouse.（この犬は、ねずみを追いかけている猫をおどした））

さらに、7a)のような文は、おそらく 7b)の文からの類推によってできたのだろうが、7b)に比べると受け入れにくい。

7)

a. *He brought a chair in order to sit on.

b. He brought a chair to sit on.（彼はすわるいすを持ってきた）

新しく語彙を作ったり、新しく音を組み合わせたりするのと同様に、文を作ったり理解したりする能力にも、体系的制約があるのである。

2. 文法と言語能力

人間は、はじめて聞くような文を無限に作ったり理解したりすることができることがわかった。この能力は言語能力(linguistic competence)と呼ばれ、言語学の重要なテーマの一つである。

言語学者は、この言語能力を研究するのに、人間が語や文を作ったり理解したりするための心的体系に注目した。この体系は文法(grammar)と呼ばれる。この本では、文法を次のような分野に分けて説明する。

表 1.2 文法の分野

分野	範囲
音声学	人の発する音声の調音法と知覚にかかわる
音韻論	人の発する音声の機能と分析にかかわる
形態論	語の構成にかかわる

統語論
意味論

文の構成にかかわる
語や文の解釈にかかわる

言語学者の使う「文法」という語は、専門的であまりなじみがないので、これから文法の特性について具体的に挙げて述べよう。

2.1 一般性：すべての言語には文法がある

すべての言語には文法があるということが、言語を分析することによって得られた結論の一つである。たとえば、ことばを話すとき、音声学的・音韻論的体系がなければ相手に理解されないし、語や文に形態論的・統語論的規則、さらに体系的な意味論的規則がなければ相手に理解されない。このような事実から、言語には文法がある、ということがわかるであろう。

世界の言語の中には、ナバホ語やスワヒリ語など、「文法がない」とよく言われる（特に文字のない言語、大学で教わらない言語についてよく言われることであるが）言語がある。あまりなじみのない言語は、よく知られた言語と比べて文法体系がちがっているという理由だけで、文法がないと言われることがある。たとえば、オーストラリアのアボリジニの言語であるワルピリ語では、英語の The two dogs now see several kangaroos（2匹の犬が数匹のカンガルーを今見ている）という文を次の語順のどれでも表すことができる。

8)

- a. Dogs two now see kangaroos several.
- b. See now dogs two kangaroos several.
- c. See now kangaroos several dogs two
- d. Kangaroos several now dogs two see.
- e. Kangaroos several now see dogs two.

ワルピリ語は英語ほどの語順の制約はないが、制約が全くないわけではない。たとえば、8)のような文で、ワルピリ語では、lu という接尾語を「犬」という語のあとにつけて、「犬が」見ているのであって見られているのではないということを示さなければならない。一方英語では、これは two dogs を動詞の前に、several kangaroos を動詞のあとに置くことによって示され

る。

ウルピリ語には文法がないのではなくて、ウルピリ語と英語では文法の制約がちがうのである。このことはすべての言語について当てはまる。全く文法が同じ言語はないが、文法のない言語はないのである。

同じ言語でもさまざまな種類があり、それらの一つ一つについても同じことが言える。たとえば、世界のさまざまな共同体で英語が話されていることはよく知られている。それぞれの共同体で話されている英語には、それぞれ独自の発音・語彙・文構造がある。これは、それぞれの英語がそれぞれ独自の文法を持っているということである。同じ言語の中のちがう種類であっても、それぞれが文法なしにはありえないのである。

2.2 平等性：すべての文法はみな平等である

ある一つの言語に二つ以上のバラエティがあるとき、その中の優劣関係が問題になる場合がある。現代の言語学の見方からすると、英語の文法はタイ語の文法よりもすぐれているなどということは、英語の中のあるバラエティが他のバラエティよりもすぐれているということと同様意味がない。どの言語にも、また同じ言語の中のバラエティのいくつかにも、人間が表現を生み出すことを可能にする文法がある。どの言語の文法も、コミュニケーションや考えの手段として全く平等なのである。

さらに、「原始的」言語、「劣った」言語というものも存在しない。書くことばも電気もないような社会で話されている言語に、最も複雑な言語現象が見られることも実際にはあるのである。

だから、どの言語がどの言語よりも洗練されているとかすぐれているとかいうように言語にランク付けするのは意味がない。言語学の目的は、それぞれの言語がどういう言語であるとか、どのように使われているとかいう観点から研究し分析することである。言語学は記述的（descriptive）であり、規範的（prescriptive）ではない。つまり、言語学者は人間の言語能力や知識を記述することを目的とし、こういう話し方をすべきであると処方することは目的としない。他の科学的学問分野でも同じ見方がされている。科学者にとっての第一の目的は、観察した事実を記述したり説明したりすることで、

事実を変えることではないのである。

英語を話す言語共同体の中でも、ある種の社会経済団体で、I seen that、They was there、He didn't do nothing、He ain't here といったパターンが現れることがある。第 14 章でも述べるが、こういったパターンを使う人々が奨学金を受けられなかったり、仕事が見つからなかったり、ある団体に受け入れられなかったりといった社会現象がよく起こる。しかし、純粋に言語学的見方からすれば、こういったパターンを作る文法には何ら問題はない。世界のどの言語の文法とも同じく、またある言語内のちがった方言の文法とも同じく、このようなパターンを作る文法も全く体系的であり、その文法によって、無限の可能性をもった考えを表現したり理解したりすることができるのである。

言語学者は規範性を否定するけれども、明確に書いたり話したりすることの重要性を否定するものではない。それは教育学者の極めて正しい目的である。しかし、文法に欠陥があるからではなく、ちょっとした不注意によって正しくない文ができてしまうことがある。次のような英文は、文法の欠陥によってではなく、明らかに不注意によってできたものである。

9)

Don't go into darkened parking lots unless they are well lit. (電気が明るくついていなければ、暗くなった駐車場に入ってはいけません。)

You probably got a letter warning you about the dangers of lead-contaminated water in your mail. (あなたはきっと、郵便の中に鉛で汚れた水の危険について警告する手紙を受け取ったでしょう。)

The poet was a guest of honor at a surprise luncheon with a birthday cake thrown by several close friends in the English Department. (英語学部の子供の親しい友だちによって催されたバースデーケーキつきのびっくりパーティーで、その詩人は主賓だった。)

Molenda's last known address was not known. (モレンダの最後に知られていた住所は知られていなかった。)

つまり言語学者は、規範があること・規範が望ましいことを否定するわけではない(実際、規範なしには、言語が効果的に機能するための知識を共有

できないかもしれない)。しかしながら、話しことばや書きことばについての規則や約束事は、どのように使うべきであるという見方によるのではなく、実際に使われている言語をもとにしなければならない。言語学者の Steven Pinker は、このことを次のようなたとえで表している。

自然界のドキュメンタリーを見ていると思ってください。生息する動物たちのありのままの姿がビデオに映し出されています。しかしナレーターは、おかしな事実を述べています。「イルカは適切に水をかいて泳ぐことができません。白頭スズメの鳴き声には誤りがあります。コガラの巣は不適切に作られていて、パンダは竹を不適切な足で持ち、ザトウクジラの歌には誤りがあり、サルの叫びには秩序がなく何百年もずっと退化し続けています。」このビデオのナレーターの説明を聞いて、みなさんはきっと「ザトウクジラの歌に誤りがあるとはどういうことなのだろうか。」と疑問に思うでしょう。

言語学者にとって、言語とはもちろん、ザトウクジラの歌のようなものです。ザトウクジラの歌に誤りがあるかどうかはザトウクジラに聞いてみなければわかりません。同じように、ある文が「文法的である」かどうかは、その言語を話す人を見つけて聞くことによって決められるのです。

2.3 変動性：文法は時間とともに変化する

どの言語の文法も絶えず変化しつづけているというのは、根拠のある事実である。その中には比較的小さくて早いものもある（たとえば、morphing（コンピュータの動画の滑らかな変化）、Internet（インターネット）、e-mail（電子メール）、cyberspace（電子コミュニケーションの領域）のような新しい語の追加など）。一方、言語全般に大きな影響を与えて、一定の長い期間にわたるものもある。たとえば、英語の否定構文は長い歴史をもっている。1200年以前の否定構文では、ne が動詞の前に、not にあたるものが動詞のあとにくる。

10)

a. Ic ne seye not ('I don't say.')

b. He ne speketh nawt ('He does not speak.')

1400年ごろには、neが使われないようになり、notあるいはnawtだけが動詞のあとにくるようになった。

11)

a. I seye not the wordes.

b. We saw nawt the knyghtes.

さらに数世紀してから、notがdo・have・willなどのあとに起こるという現代英語に見られる構造になった。

12)

a. I will not say the words. (それまでは、*I will say not the words.)

b. He did not see the knights. (それまでは、*He saw not the knights.)

このように文法は時代とともに変化する。11)のような構造は現代の標準からするともう古語のように聞こえ、10)のような構造は、現代の英語話者には全く異質に聞こえる。

ある種の言語が他の言語よりもすぐれていると信じこんでいる人々の中には、英語が退化してきていると言う人がいた。たとえば、1710年に、「ガリバー旅行記」の著者 Jonathan Swift は「英語という言語がどんどん悪くなっている」と嘆いた。Swift が指摘した悪化の一つの例は、he is が he's になる短縮形であるが、彼自身 It is の短縮形 Tis を使っている。

19世紀にはいって、ニューヨークの evening post のコラムニストであった Edward S. Gould は、「よい英語、よく起こることばのまちがい」という本の中で、「事件小説」の執筆者に対して、jeopardize (危険にさらす)・leniency (甘やかし)・underhanded (秘密の) などの「いんちきの語」を使ってことばをだめにしていると非難した。今日に至ってもなお、言語警察を自負する Edwin Newman、John Simon などの人気作家によって、ことばはこうあるべきだという議論がなされている。

言語が歴史上のある時点で完成し、その後退化するという見方を言語学者は否定する。これまで述べたように、ある話し方が別の話し方よりもよいと

いう意見には確固とした証拠がない。したがって、コミュニケーションの手段としての英語の適切さを言語変化が弱めるという考えは、全く理由のないことなのである。

2.4 普遍性：どの言語における文法も基本的には同じである

音の起こるパターンや語彙、語順などを少し調べただけでも、世界の言語にはさまざまなちがいがあることがわかる。しかしこれは、人間が獲得して使う文法の型に全く制限がないという意味ではない。それどころか、人間の言語すべてに共通する文法原則があることが、最近の研究で明らかになっている。

文を否定するやり方がその一つである。英語の not にあたる「否定詞 (negators)」は、言語によって文中のどこに起こるかがちがう。次の4つの可能性がほぼ同じ確立で起こることが予測される。

13)

- a. Not Pat is here.
- b. Pat not is here.
- c. Pat is not here.
- d. Pat is here not.

しかし、実際には a と d のパターンはまれで、not のような否定詞は動詞の直前か直後に起こるのがふつうである。

語が文中に起こる順番にも制約がある。たとえば、3語文 Canadians like hockey という文には次の6つの順番が考えられる。

14)

- a. Canadians like hockey.
- b. Canadians hockey like.
- c. Like Canadians hockey.
- d. Like hockey Canadians.
- e. Hockey like Canadians.
- f. Hockey Canadians like.

興味深いことに、世界の言語の95%以上が a、b、c の語順である。d、e、f、

の語順の言語は非常に少ない。このことは、言語にはなんらかの制約や傾向があることを反映している。

第2章以降でも述べるように、これ以外にも文法範疇や文法原則が普遍的である例がある。さらに、いくつかのパターンがあるとき、語順に見られるようにその選択の範囲は非常に限られている場合が多い。ちょっと見た目とはちがって、人間が習得して使う文法には、非常に制限があるのである。

2.5 潜在性：文法知識は意識下にある

ことばが使えるのは文法が前提としてあるからで、人間はみな文法の知識を持っていなければならない。しかし、この知識は、家や学校で習う数学・交通ルールの知識などとはちがう。文法の知識は他の知識と違って、教わらなくても子供のときからすでに獲得していて、一生のあいだずっと意識下にある。たとえば、過去を表す接尾語 -ed の発音について考えてみよう。

15)

- a. hunted
- b. slipped
- c. buzzed

hunted では id と発音するが、slipped では t、buzzed では d と発音する。また、flib という新しい語を聞くと、その過去形 flibbed は d で発音する。英語の母語話者であれば、この違いは意識しないでもできる。それは、子供のときから意識下に体系的発音を導く文法ができているからである。

英語の母語話者は、次の左右のペアのような微妙なちがいを使い分けることもできる。

16)

- a. pint *paynk
- b. fiend *fiemp
- c. locked *lockf
- d. wronged *wrongv
- e. next *nexk
- f. glimpse *glimpk

左側の語は、語の最後に現れる子音の組み合わせの制約にしたがっている。つまり、母音が長くて、そのあとに子音が二つある場合と、母音が短くて、そのあとに子音が三つある場合、最後の子音は舌先が上がって発音されなければならない（t, d, s, z の発音では舌先が上がるが、p, f, v, k の発音では舌先が上がらない）。このような音の制約に合わない語（右側の語）は、英語の話者に受け入れられない。このような音の制約については、言語学者によってさらに深く解明されなければならないが、日常ことばを使う時には、音についての意識下の知識にもとづいて、受け入れられる語かどうかを決めるのがふつうである。

最後の例を考えてみよう。he がグループのそれぞれの一員を指すか、グループ外の一人の人を指すかは文構造によってきまる。

17)

Each boy who submitted an essay thinks that he is a genius.

17)の意味は、作文を提出したそれぞれの少年がみな自分のことを天才だと思っているか、あるいは、それぞれの少年がここに出てこないある人（Albert Einstein など）が天才だと思っているかのどちらかである。しかし、次の文では、一つの解釈しかできない。

18)

The woman who read each boy's essay thinks that he is a genius.

18)では、heはこの文に出てこない人しか指すことはできない。17)とちがって、heはeach boyという語によって表されるグループの中のそれぞれの一人を指すことはできない。英語話者にこのようなちがいがわかるのは、文法の原則が意識しなくても身につけているからである。

2.6 文法

結局、言語学者の使う「文法」という術語は意識下にある、特別なタイプの言語体系を指す。文法はいくつかの学問分野（音声学（phonetics）・音韻論（phonology）・形態論（morphology）・統語論（syntax）・意味論（semantics））を構成し、無限の発話を作ったり理解したりすることを可能にする。文法のない言語はなく、文法の知識なしに言語を使うこともできないので、文法体

系の研究が現代の言語学的分析の焦点となっている。

既に述べたように、言語を使ったり理解したりするのに必要な文法知識は教えられなくても獲得できるので、その大部分は意識下にあるといえる。だから、文法は、前に練習したことを思い出したり自己反省したりして調査研究することができない。そこで、人間の言語体系を研究するには多大な努力と工夫が必要である。どの科学でも同じように、観察できる事実（語の発音、文の解釈など）から、このような現象が起こるメカニズム、時として目に見えないメカニズムについての推論を引き出さなければならないのである。この本のかなりの部分は、こういった研究の成果や、人間の言語の性質・使用方法にかかわるものである。

3. ことばの生物学的特殊性

現在世界で話されている言語は、今わかっている限りでは、すべてが共通の源にさかのぼるということはいえない。むしろ、世界の言語は多くの語族に分かれており、それぞれの言語の歴史は数千年以上さかのぼることはできない。言語は、少なくとも 10 万年以上前から存在していたが、そのころの言語がどうだったか、また言語はどこから起こったかについては全くわかっていない。

にもかかわらず、人間には他の生物にはない特別の言語能力が備わっていると信じるに足る理由はいくらでもある。ことばを使うための生理学的しくみの進化は人間だけに起こったのである。いわゆる発声器官（肺・喉頭・舌・歯・唇・軟口蓋・鼻腔）は生物の生き残りに直接かかわってきた。しかしこれらの器官は、ことばを使う目的のためにも分化した。たとえば声帯は、チンパンジーやゴリラなど、人以外の霊長類に比べると筋肉質で脂肪が少ない。声帯には神経の細い管が網の目のようにめぐっているため、脳の命令に対して正確に反応する。同じように神経の細い管がめぐっている器官（舌・口蓋・唇）は、他の発声器官よりもずっと自由に操ることができる。これらは、他のどの霊長類よりもすぐれている点である。表 1.3 は主要な発声器官の発声機能と、生物としての機能とを対比させたものである。

表 1.3 発声器官の二つの機能

器官	生きるための機能	発声するための機能
肺	二酸化炭素と酸素を交換する	発声のための呼吸を準備する
声帯	肺への道をふさぐ	有声音を出す
舌	食べ物を歯やのどの奥に動かす	母音と子音を発する
歯	食べ物を噛み砕く	子音の調音点となる
唇	口腔空間をふさぐ	母音と子音を発する
鼻腔	息をする	鼻音を発する

ことばを発声する器官にはもう一つ大事なことがある。それは、生きるための呼吸よりも話すための呼吸の方が、肺圧が高く呼吸が長いということである。発声するのに必要な空気圧を維持するためには、ふつうに呼吸するときは使わない腹筋が、うまく作動する。人間にしかない神経の行き届いた器官によって、この種の呼吸法が可能になるのである。人間は、話すことばに対する知覚も他の生物よりすぐれていることが明らかになっている。たとえば人間には、母音の区別を知覚する特別の神経のしくみがあるといわれている。これは他の哺乳類にはないものである。

語構成・文構成・意味の解釈など、発声したり聞いたりする以外のことばの面については、直接観察できるわけではないので、進化論的分化の過程を述べるのはむずかしい。しかし、脳の部分部分がそれぞれ語の構成・文の構成・意味の解釈などにかかわっているため、少なくとも進化論的分化が実際にあったことだけはまちがいない（第11章「脳と言語」を参照）。これは、人間の脳が特にことばをつかさどるために作られていることを示している。他の生物の脳は、人間のことばを可能にする文法を獲得したり使ったりすることはできないのである。これについては第16章の「動物のコミュニケーション」で述べる。

まとめ

人間のことばには「創造性 (creativity)」がある。言語話者は、新しい発話を作ったり理解したりするのを可能にする「文法 (grammar)」を頭の中

に持っている。文法は、発音・知覚・発声する音の識別・語や文の構成・発話の解釈にかかわっている。すべての言語には、表現するための文法が平等にあり、言語話者はみな文法知識を（意識下に）もっている。人間だけがもつそのような言語体系は、解剖学的分化・認識論的分化によってできたものである。

キーワード

changeability（変動性）、creativity（創造性）、descriptive grammar（記述文法）、grammar（文法）、linguistic competence（言語的潜在能力）、morphology（形態論）、native speakers（原語話者）、phonetics（音声学）、phonology（音韻論）、prescriptive grammar（規範文法）、semantics（意味論）、syntax（統語論）、tacitness（潜在性）、universality（普遍性）

出典

語構成の検討については Eve Clark and Herb Clark の論文 “When Nouns Surface as As a Verb” in *Language* 55: 767-811 (1979) による。ワルピリ語のデータは K. Halle の論文 “Person Marking in Walburi” in *A Festschrift for Morris Halle*, edited by S. Anderson and P. Kiparsky (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1973) による。9) の用例は James Kilpatrick が、論文 “Mrs. Malaprop’s Mangled Prose Set a President” in *Smithonian* (Jan.1995): 82-87 による。2.2 の引用文は、下に挙げた Steven Pinker (p.370) からのもの。Gould の本は Dennis Baron の “Grammar and Good Taste” (New Haven: Yale University Press, 1982) からの引用。人間の言語の文における否定詞の位置についてのデータは O.Dahl の論文 “Typology of Sentence Negation” in *Linguistics* 17: 79-106 (1979) による。下に挙げた Bickerton と Pinker による本は人間のことばの出現についての異なる見方を示している。この章の問題は Joyce Hildebrand によって作られた。

推薦図書

Bickerton, Derek. 1990. *Language and Species*. Chicago: University of

Chicago Press.

Clark, David. 1987. The Cambridge Encyclopedia of Language. New York: Cambridge University Press.

Pinker, Steven. 1994. The Language Instinct: How the Human Mind Create Language. New York: Morrow.

問題

1. 次の文は、この章の第1節で述べた過程にもとづいて名詞から作られた動詞を含んでいる。この新しい動詞の意味をそれぞれ書きなさい。

- a) We punk-rocked the night away.
- b) She dog-teamed her way across the Arctic.
- c) We MG'd to Oregon. (MGはスポーツカーの名前)
- d) They Concorded to London.
- e) He Gretzky'd his way to the net. (Gretzkyはアメリカで有名なホッケー選手)
- f) We Greyhounded to Toronto.
- g) We'll have to Ajax the sink. (Ajaxはクレンザーの商品名)
- h) He Windexed the windows. (Windexはクレンザーの商品名)
- i) You should Clairol your hair. (Clairolはヘアスプレイの商品名)
- j) Let's carton the eggs.

2. 1番の問題を参考にして、名詞から5つの動詞を作りなさい。また、その動詞を含む例文を作って、その意味がわかるようにしなさい。

3. 次の8つの語のうち英単語として可能な語はどれですか。

- a) mbood b) frall c) coofp d) ktleem
- e) sproke f) flube g) worpzs h) bsarn

4. あなたは広告代理店の経営者で、新しい名前の製品に投資しようとしています。英語として可能な名前と可能でない名前をそれぞれ4つずつ作りなさい。

5. 真新しい発話が可能かどうかを判断する能力は言語的潜在能力の一部です。次のそれぞれの文のうち英語として可能な文はどれですか。また、可能でない文については可能な文に直して、その二つを比べなさい。

- a) Jason's mother left himself with nothing to eat.
- b) Miriam is eager to talk to.
- c) This is the man who I took a picture of.
- d) Colin made Jane a sandwich.
- e) Is the dog sleeping the bone again?
- f) Wayne prepared Zena a cake.
- g) Max cleaned the garden up.
- h) Max cleaned up the garden.
- i) Max cleaned up it.
- j) I desire you to leave.
- k) That you likes liver surprises me.

6. 次のそれぞれの文は、ある英語話者にとっては可能な文です。それぞれ規範的規則によって違反している箇所を改めなさい。

- a) He don't know about the race.
- b) You was out when I called.
- c) There's twenty horses registered in the show.
- d) That window's broke, so be careful.
- e) Jim and me are gonna go campin' this weekend.
- f) Who did you come with?
- g) I seen the parade last week.
- h) He been lost in the woods for ten days.
- i) My car needs cleaned 'cause of all the rain.
- j) Julie ain't got none.
- k) Somebody left their book on the train.
- l) Murray hurt hissself in the game.